

## 『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 23 年度派遣報告書

——ケニア・ナイロビ大学、アチョリ語、H23. 7. 2-H24. 2. 23——

平成 22 年入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程 1 回生

川口博子

### 自分の研究テーマについて

サハラ以南アフリカでは、紛争が大きな問題となってきた一方で、現在、紛争後社会における和解と社会の再構築に代表される平和構築が喫緊の課題となっている。近年、この平和構築への取り組みとして、在来の知識を取り入れようという動きがある。国際機関などが押し付けてきた西洋近代的な紛争処理ではなく、それぞれの地域の人びとによって編まれてきた地域社会の在来の知識こそが、地域社会の再構築に寄与するのではないだろうか。

ウガンダ共和国北部でも、私の調査対象であるアチョリという人びとが住む地域では、1986 年から政府軍とアチョリを中心とした反政府軍による武力紛争が始まった。紛争下では、虐殺や略奪が繰り返され、反政府軍は子どもを誘拐して兵士として戦わせた。ウガンダ政府は、人びとを半強制的に国内避難民キャンプに移住させたが、社会秩序は乱れ、栄養不足や病気で多くの人びとが死亡した。

現在のアチョリランドは、戦後復興の過程にあり、元兵士と一般住民の和解をはじめとした社会の再構築が大きな課題となっている。私は、今後の研究において、紛争後の社会の再構築を目指した人びとの日常実践や、アチョリの在来の伝統的な紛争解決の技法がどのように使われるのかを検証する。そして、今まで経験したことのない大混乱から、人びとはどのように立ち上がり、社会を再構築していくのか、その姿を描き出すことが、私の研究テーマである。

### 研修言語の概要

アチョリ語は、ウガンダ北部に約 120 万人とスーダン南部に約 4 万 5000 人の話者人口をもつ。ナイール・サハラ語族西ナイロート系のルオ諸語のひとつである。このアチョリ語を話す人びとは、スーダン南部を起源とし、干ばつなどをきっかけとして、南下を始めたグループの一部である。よって、ウガンダ共和国の南部を占めるバンツー系言語とは大きく異なる。

### 語学研修の内容について

私は、2011 年 7 月 2 日から 2012 年 2 月 23 日まで ITP プログラムによって派遣され、そのうち 60 日間はケニア共和国の首都ナイロビで語学研修を受けた。現在の現在の受け入れ先機関であるナイロビ大学アフリカ研究所では、アチョリ語の講義は開講されておらず、同研究所から紹介された語学学校

(Anglican Church of Kenya: ACK)

でアチョリ語を学んだ。平日はほぼ毎日、語学研修を受けて、計 46 日間、語学学校に通った。同校に

は、常勤のアチョリ語の先生がおらず、ACKの人脈をつかってナイロビ在住のウガンダ出身のアチョリ人の先生を探してきてもらった。また、同時期に、私以外にアチョリ語を学ぶ生徒がいなかったため、マンツーマンの個人レッスンを受けることになった。

授業内容も、語学学校に教材がなかったため、私が日本から持参した The Essentials of Lwo(Acoli)という、植民地時代に書かれたアチョリ語の文法書を用いた。しかし、約60年前に書かれた文法書の表現と現在の口語表現は異なっている点が多く、先生がそういった点を指摘する形で授業を進めた。私は、語学研修に参加する前にこの文法書を使って独学していたので、100ページ余りの文法書を全日程の4分の3ほどで終えることができた。その後は、私が最も好きな詩人の1人で、世界的にも著名なアチョリ人のオコット・ビテックの Wer pa Lawino Wer pa Ocol という詩の読解をすすめた。全日程を終えて、会話はもちろん、文章も童話や詩を読む程度はできるようになった。

### 研修期間中に印象に残った体験や経験

アチョリ語は、ウガンダ北部で主に話されている言語であるため、大都市のナイロビといえども、語学学校の外でアチョリ語を聞くことはついになかった。しかし、アチョリ語と言語学的にかなり近い言葉をはなすルオという人びとに出会い、友人になった。アチョリ語とルオ語はかなり似ていると人びとは語っていたが、残念ながらアチョリ語を話すので精いっぱい私には、ルオ語で何を言っているのをアチョリ語の語彙から類推するまでには至らなかった。しかし、基本的な単語には、同じものがあり、それらを私が口にすることで、ケニアのルオの人びととの友人の輪が広がった。南スーダンから移動を開始した彼らの祖先たちのうち、ウガンダ北部に留まった人たちがアチョリとなり、そのままケニアのビクトリア湖岸まで進んだ人びとがルオとなった。言語を通じて、歴史の中にある人びとの移動のダイナミズムを感じることができた。



伝統的首長とその家族



「和解」の儀礼

### 目標の達成度や反省点について

ナイロビでの語学研修によって、基本的な文法は十分に習得できた。また、詩やおとぎ話などの文章の読解により、語彙力もついた。しかし、読解中心の授業が多かったため、アチョリ語の声調の使い分けに課題が残ってしまった。実際には、はっきりと使い分けなくても、文脈などである程度推測することが可能であるが、音痴である私には、アチョリ語の単語が高い声調を使っているのか低い声調を使っているのかわからない。声調は今後の大きな課題となった。

また、調査地では、老人を相手に聞き取りをすることが多いが、私の先生は、20代の若者であったため、先生の使っていたアチョリ語に慣れていた私にとっては、聞き取り相手の老人のアチョリ語が非常に難解で、理解できないこともあった。今後は、フィールドワークを通して、さまざまな話者に対応できるアチョリ語力を身に着けたいと思う。



ゴマの収穫



当事者親族による殺人に対する賠償の受け渡し